

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：34416

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06744

研究課題名(和文)近代における漢学塾出身者の事業活動と実践倫理の研究 大阪の泊園書院を中心として

研究課題名(英文) A study of business activities and practical ethics of the graduates from Hakuen-Shoin, one of Chinese classic schools at Osaka, in modern times.

研究代表者

横山 俊一郎 (YOKOYAMA, Shunichiro)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：60759827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代日本の工業化に貢献した泊園書院出身実業家の分布状況および実践内容を把握するとともに、彼らの人格形成に影響を与えたと考えられる院主藤澤南岳の実業思想および近代理解を分析したものである。考察の結果、明治期の泊園書院には企業勃興期に資産を形成した大阪商人および地方地主が多数在籍していたが、武士出身の本多政以、農民出身の尾中郁太、商人出身の永田仁助については、彼らは南岳が創立した儒教振興団体・大成教会の会員であるとともに南岳の文明、科学、宗教観に近い考え方をしていたことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this paper is to find the distribution and practical contents of businessmen from Hakuen-Shoin who contributed to the industrialization of Japan in the Meiji era, and to analyze the notions of "business" and "modern" of their teacher, Fujisawa Nangaku, who had an influence on the formation of their characters.

As a result, I found many Osaka merchants and local landlords who became asset owners during the economic boom of the Meiji era, enrolled in Hakuen-Shoin. And I confirmed that some of them were members of Taisei Kyokai, the organization of promoting Confucianism, which Nangaku established. Especially, I made clear that the views of Honda Masazane who was an ex-samurai, Onaka Ikuta who was an ex-farmer, and Nagata Nisuke who was an ex-merchant, were closely connected with Nangaku's view on civilization, science, and religion.

研究分野：日本漢学

キーワード：泊園書院 藤澤南岳 企業勃興 大成教会 本多政以 尾中郁太 永田仁助

1. 研究開始当初の背景

これまで明治期の漢学塾は、端的にいえば中等教育の補完、洋学受容の基盤、農村指導者の養成という三つの機能を果たしたとされる。そこには、近代的な制度文物の移入とともに漢学塾はやがて社会的使命を終えるという共通認識が存在する。

本研究で取り上げる泊園書院は、四国讃岐の儒者藤澤東暎によって江戸後期に開かれ、幕末から明治、大正をへて昭和前期まで続いた大阪の漢学塾である。この漢学塾が明治期に刊行した門人名簿『登門録』に記載された門人の身元を調べると、企業勃興期の新長者であった商家の子弟の名前を多く確認することができた。すなわち、岡橋家(岡橋恒三)、逸身家(逸身佐兵衛、逸身豊之助)、木原家(木原忠兵衛)、豊田家(豊田宇左衛門)がそれである。

また注目すべきことに、これらの泊園書院出身実業家は都市大阪のみならず地方にも広く分布している事実が明らかとなった。彼らに共通する特徴としては、銀行・紡績・鉄道といった近代産業の創立・経営に関与しているほか、日本資本主義の父と呼ばれた渋沢栄一のように多方面の「事業」に関与している点が挙げられる。これは漢学塾で培った儒教教養が、経済領域に限らず多方面の「事業」の関与を促進する実践倫理として機能していた可能性を示唆している。

2. 研究の目的

大阪の泊園書院は近代日本の工業化を支えた多くの実業家を輩出した漢学塾であるが、彼らを取り上げた研究はほとんど見当たらない。これは儒教研究における実務家軽視の傾向が背景にあるのだろう。しかし、東アジアの儒教教養人である士大夫や両班は、思想家であると同時に実務家であった。この本来の両義性を考慮すれば、明治期の泊園書院出身実業家を考察対象に取り上げて不思議ではない。

本研究では、関西大学総合図書館の泊園文庫に加えて、石川県、山口県、大阪府の各公立図書館に所蔵された泊園書院出身実業家の諸記録を収集、調査、考察し、その経済および社会領域で展開される「事業」活動の実態を解明するとともに、それと当時の院主・藤澤南岳が提唱した文明論的な経世論、とりわけその実業思想および近代理解の側面との影響関係について実証的に考察する。

3. 研究の方法

以下の手順に従って、上記の研究を遂行する。

- (1) 泊園書院出身実業家の分布状況の把握
- (2) 院主・藤澤南岳の実業思想の分析
- (3) 泊園書院出身実業家の実践内容の把握
- (4) 院主・藤澤南岳の近代理解の分析

(1)と(2)については、両者の関連性が強かったため、一つの研究成果としてまとめた。(3)については、武士を出自とする本多政以、農民を出自とする尾中郁太、商人を出自とする永田仁助の三名をそれぞれ研究成果としてまとめた(ただし尾中の場合、彼の義弟古谷熊三も考察対象に含めた)。

4. 研究成果

(1) 泊園書院出身「企業家」と院主南岳の実業論

本研究では、まず近代的な「会社」を創立・経営するなど「企業勃興期」を中心に資産を形成し「工業化期」まで生き抜いた大阪の「商賈」たちが泊園書院を支持していた事実を明らかにし、さらに彼らのような泊園書院出身「企業家」が山陽地方の地主層にも存在することを明らかにした。そこで南岳が「企業勃興期」の初期に創立した儒教振興団体・大成教会で説いた教説から、南岳の「会社」の創立・経営についての認識や「商賈」観を見た。考察の結果、南岳の上記の教説は、以下の五点に総括される人格の形成を促すものであった。

①みずからの職能集団の生産拡大に繋がる事業を国事行為と見なし、会社設立にも意欲的になる。みずからの材徳を高め、自由を享受しようと会社長の就任を目指す。みずからを万物の霊であると自覚し、主体的な決断に従って一家を運営する。みずからの廉恥心を拡充させ、私的な生活利害の次元を越えた経営判断を下す。みずからと他者の人情を管理することで協業関係を作り出し、それを外部環境に即応させていく。

以上のように、南岳は泊園書院出身「企業家」に対し「会社」の創立・経営へと導く論理を確かに説いており、しかもそれが人間・社会・国家論から個別具体的な経営哲学に至るまで、多岐にわたるものであったことがわかる。

また本研究では、南岳の「会社」や「商賈」に関わる言説を手がかりとして、南岳の実業思想を構成するキーワード、すなわち「愛国と国体」「自由と自治」「自欺と廉恥」「人情と時措」を抽出することができた。これらの諸概念は互いに全体を補完するものと考えられるが、「愛国と国体」と「自欺と廉恥」については、それぞれ家業および市場道徳に位置づけられ、両者は管仲の制作の意図の把握を通して国益ないしは公益を志すという点に特徴がある。南岳のいう国体とは、そうした中国古典における一つの理想を投影したものであった。

しかし南岳はそれと同時に西洋の科学を時勢として認識していた。「人情と時措」における新陳代謝という時勢認識そのものが進歩の観念を受け入れた結果であろうし、それゆえ「自由と自治」における不幸の江戸、幸福の明治という図式が強調されていたように思われる。また、それは虚芸の江戸とい

う理解をも伴って、実践性に乏しい名実の伴わない儒者への批判や利用厚生重視へと繋がった可能性が高い。

(2) 泊園書院出身者本多政以の企業者活動

本研究では、近代における泊園書院出身者の事業活動の一事例として、石川県金沢市の実業家本多政以に注目し、彼の経歴を通して事業活動を明らかにしつつ、その背後にある倫理性如何という問題に幾らか接近することを試みた。

本多家は先祖代々加賀前田家の筆頭家老を務め、その家禄は小大名に匹敵する家柄であった。政以は元治元（1864）年に生まれ、維新期の藩政改革を主導した父政均が殿中で暗殺されることにより、わずか六歳で家督相続するに至る。政以は幼少期の時点では旧藩以来の教育を受けていたが、青年期になると付添の学友を伴って東京・大阪へと遊学した。途中、東京在住の泊園門人大城戸宗重の勧めにより、明治13（1880）年、泊園書院に入門している。しかし退塾後は、司法省法学校の学生河村善益を介して鎌倉円覚寺の泊園門人今北洪川のもとで修行するなど、臨済宗の公案禅へと傾倒していく。

帰郷直後の明治20（1887）年、政以は土族授産のため養蚕業を創始し、のち製糸業、織物業へと業態を発展させる基礎を築き、その翌年には四高に勤める泊園門人黒本植とともに「照顔講」という四高生を対象とする修養団体を創立した。そのうち、政以は旧主前田家の家政を与りつつ、経済面では石川県農工銀行、金沢電気軌道、金沢紡績の社長（もしくは頭取）を務め、政治面では金沢実業会会長として金沢市政の刷新に取り組んだほか、立憲政友会の創立を援助し、貴族院議員として鉄道国有化を推進するなど、中央政界でも重きをなすに至った。

では、上記のように金沢の「物質界」と「精神界」の両面で指導的立場にあった政以の倫理性とは如何なるものであったのだろうか。政以の思想を特徴付ける出来事としては、徂徠学から臨済禅への傾倒が挙げられる。これは洪川のいう徂徠学の「心性の事」の不十分さがその原因であることは、当時の政以が「陽明学の狂人」の河村善益と共鳴している点から見て、そのように推測できる。しかし、その洪川自身が儒教と仏教の差別のない大道を志している点を見れば、政以は儒教を否定したというよりも、むしろ儒教を補完するものとして禅宗の一部を取り込んだ可能性が高い。

実際、政以は泊園門人の黒本とともに立ち上げた「照顔講」では、『靖献遺言』や『弘道館記述義』の輪講を実施している。したがって、たとえ徂徠学から臨済禅への傾倒があったとしても、幕末以来の泊園学を構成した尊王思想や後期水戸学の要素は政以の実践倫理の中核にあり続けたと思われる。

(3) 泊園書院出身者尾中郁太・古谷熊三の企業者活動

本研究では、近代における泊園書院出身者の事業活動の一事例として、山口県佐波郡の実業家尾中郁太とその義弟古谷熊三に注目し、彼らの経歴を通して事業活動を明らかにしつつ、その背後にある倫理性如何という問題に幾らか接近することを試みた。

彼らは慶応2（1866）年生まれ富農の子弟であった。郁太を輩出した尾中家については享保期に農業の傍ら醸造業を創めることにより資産を形成した家であり、文久期には農民で構成された軍隊の要職を務め、明治6（1873）年初めて塩田を購入している。彼らは地元の私塾で漢学を学んだのち、明治15（1882）年大阪の泊園書院に揃って入塾、二年間在籍した。郁太については東京の東洋英和学校で西洋の学問を学んだりもしている。

帰郷後、彼らは村の塩田所有者となり、町村議員などの公職にも就いた。郁太についてはウラジオストックにおける塩の商取引、右田毛利家が進めた佐波郡内の開拓事業にも関与している。明治29（1896）年塩田貯蓄銀行の創立に揃って参画、大正3（1914）年には郁太は頭取に就任した。郁太は山口県最初の専業貯蓄銀行とされる塩田貯蓄銀行を創設して以来、取締役を務めていたが、その間、弟の日露戦争戦死の恩賜金の全部と伝家の図書一切を寄付し、華南尋常小学校内に華南図書館を設立するなど、経済事業のみならず文化事業にも尽力している。

では、上記の事業活動を展開した彼らの倫理性とはどのようなものであろうか。まず郁太と熊三に共有された現実認識と理想社会についていえば、「生存競争」「優勝劣敗」という西洋由来の社会進化論を背景とした世界・社会・人間観のもと、その国家レベルの競争に打ち勝つため、諸個人間の「利己」「拝金」「粗暴」「詐欺」を抑制させる、いわゆる公平・公正な国民的経済倫理を確立することであった。

ただし郁太の場合、人間の内面における「崇拜的観念」に期待したのに対し、熊三の場合、社会の制度における「真成の競争」に期待している。それは、熊三が『國家論』の中で二項対立する概念として述べたように、最終目標を共有する両者にも、「宗教」による「良心」の栽培をより重視する郁太、「法律」による「行為」の矯正をより重視する熊三というプロセスの違いがあったからではないだろうか。その結果として、郁太は「古の忠臣孝子」の功績は「青史」に存在する以上のものであるべきだと考え、熊三は「古代」が「野蛮の時代」であることを踏まえて西洋由来の市場原理による幸福増進を説くという、一見すると対照的な論理展開をしたように思われる。

(4) 泊園書院出身者永田仁助の企業者活動

本研究では、近代における泊園書院出身者

の事業活動の一事例として、大阪商人出身の実業家、三代永田仁助に注目し、彼の経歴を通して事業活動を明らかにしつつ、その背後にある倫理性如何という問題に幾らか接近することを試みた。

永田家は古くからの大阪商人ではなく、19世紀前半に播磨から移住して米穀商を開業した新興商人であった。仁助の父二代仁助は仲買人を介さずに販売したり生産地を買い占めたりするなど、新しい試みをする人であったらしい。

仁助の泊園書院での学びは前期と後期に分けられる。前期は、先述した明治8(1875)年から家督相続をはさんで明治14(1881)年に高津役場に務める前の時期である。後期は、仁助が町内世間の表面で活動する機会が増えてきた明治20(1887)年から市会・府会議員の当選をはさんで明治27(1894)年に大阪明治銀行を創立する前の時期である。こうした就学履歴からは、仁助が就職に際して一時的に学問から遠ざかったものの、実務上の必要から再び学問に励み始めた様子が読みとれる。

一方、実業家仁助の前期の仕事は、明治27(1894)年大阪明治銀行の取締役となり、明治32(1899)年浪速銀行の常務取締役を務めるなど、主に銀行関係に注力したことである。中期の仕事は、明治41(1908)年浪速銀行の頭取就任に加えて、阪堺電気軌道や大阪電気軌道の取締役を務めるなど、主に銀行・鉄道関係に注力したことであった。後期の仕事は、大正11(1922)年過去に社長を務めた大阪電燈の買収問題のため島徳蔵と謀って仲裁の労をとったことである。

では、社会公共をたつとび大阪商人の家に生まれ、銀行業や鉄道業の創立のみならず諸集団間の仲裁にまで関与した仁助の倫理性とは如何なるものであったのだろうか。

まず仁助の国家・社会・歴史への対峙の仕方についていえば、それぞれ「臣民と公道」、「独立と中和」、「進歩と克己」というキーワードで示せるように、一般的に普遍性と固有性ないしは近代性と近世性と理解されがちな両者が併存する形をとって説かれている。これは仁助がこれらの両者が矛盾なく昇華しうるものと理解していたことを示唆しており、その思考の背景には「自然」の「進歩」性こそが「真理」であるとする強い信念があったに相違ない。この仁助が想定する「自然」の「進歩」性は、儒教古典に則った個人の自己修養が社会の公正な競争ないしは評価を促すことであり、それは個別の会社内部のみならず経済社会全体に向けられたものであった。また、仁助の儒教は、公正な経済社会を志向するだけでなく、天との宗教的一体化を通して事業における不断の挑戦を促すものであった。

(5)院主南岳の近代理解と儒教的思考枠組

本研究では、近代の泊園書院が多数の実業家を輩出したことと、そこでの漢学が西洋の学問と何らかの交渉を持ったこと、この両者の間に因果関係があるものと仮定し、当時の院主藤澤南岳が彼ら泊園書院出身実業家に配布したテキスト『弘道新説』の内容を検討した。その結果明らかとなった南岳の近代理解を以下の三点にまとめる。

まず一つめは、南岳の文明理解についてである。南岳が理想とする文明は、儒教的な復古による進歩であった。それは『書経』大禹謨篇の三事(利用、厚生、正徳)を典拠として現実社会を機械法律道徳(の時代)と発展史的に理解し、さらに一家を基礎単位として礼義の向上を奨めている点からしてそれは明らかである。また、南岳は欧州の教養人の動向を意識して職業生活では礼義を基本としつつ実理哲学、すなわち実証主義の要点を把握すべきだと主張する。

次に二つめは、南岳の科学理解についてである。南岳が理想とする科学は、国家的な利害調整機能を果たす公平の倫理を含むものであった。南岳は政治領域における政府と民権、さらに民権内部の対立に直面した結果、実証主義に内在する私利の問題を自覚するに至った。そのため、宗教性をも兼ね備えたピエール・ラフィットの実験学を共感するとともに、自らも私利抑制のための文飾、すなわち礼の体系化を図ったのだろう。これは公平の倫理を發揮した歴史上の人物を模範としてその行いを現実社会で実践することであった。

最後に三つめは、南岳の宗教理解についてである。南岳が理想とする宗教は、人類の進歩と平和を両立させる信仰体系であった。そのため、南岳はアーサー・ナップのいう真実の宗教に興味を示しつつも、対立の元となる宗教に代わってその蒙昧さを排除する天を掲げる。南岳は人類を天人関係に置いて善悪と禍福による規範化を促すのであった。また、南岳は人工の賛助による人間の作為性を強く肯定していたが、そこには人間を含む万物を経営しようとする感覚が見られる。

(6)結論と展望

(5)で得られた南岳の文明、科学、宗教理解を踏まえて、泊園書院出身実業家(本多政以、尾中郁太、永田仁助)の意識との関わりを検討する。

まず、本多政以の場合である。政以は自らの事業を展開する傍ら、四高生を対象とする「照顔講」を運営した。これは文天祥の『正気の歌』の一節に由来する修養団体であるが、その活動としては、道徳や時事についての意見交換と併せて『靖献遺言』の輪講も行われた。『靖献遺言』には大義名分を貫いたとされる中国の歴史上の人物の伝記やそれに対する賛辞が見られる。ここに南岳の(科学理解の結果としての)歴史認識に通じるもの

が窺われる。

次に、尾中郁太の場合である。郁太の揚子江沿岸を視察した際の紀行文『遡江日乗』によると、彼は全ての清国人が「古の忠臣孝子」（具体的には岳飛、曾國藩、孔子）の功績を現実生活に生かしていない事実に驚いた。そして、その結果として全ての清国人が「拝金宗徒」として自己利益を追求するため、清国は国家としての利権を縮小せざるを得ないだろうと予想する。ここに南岳の科学理解、とりわけその私利抑制としての礼と一致するものが窺われる。

最後に、永田仁助の場合である。仁助の最晩年の作である『偶感隨筆』によると、彼の国家・社会・歴史に向き合うスタンスは、それぞれ「臣民」と「公道」、「独立」と「中和」、「進歩」と「克己」が矛盾なく昇華するものとしてあった。ここに南岳の文明理解の根本、すなわち儒教による進歩と一致するものが窺われる。また、彼の養子秀雄の回想によると、彼は天が人の「生死」や「富貴」を決すること、すなわち天の運命説を信じつつ、それを逆手にとって事業に挑戦するとともに「天人合一」の宗教観の持ち主でもあった。ここに南岳の宗教理解の根本、とりわけその天人関係による規範化と一致するものが窺われる。

以上のように、武士・農民・商人を出自とする泊園書院出身企業家の思考は、少なからず南岳の文明、科学、宗教理解に沿うものとして存在した。

儒教研究における実務家への関心、とりわけ近代におけるそれは未だに高まらないが、それでも「政策者」については、近年、明六社同人その多くが明治政府の官僚であったの議論に対し、そこには江戸時代以来の漢学を背景とする「政策者」の思考が存在したとする見解が提出された。確かに彼らこそ明治の政治変革を主導したグループであったが、同時代の経営変革を担った民間の「企業家」の思考については未だに注目されていない。今後も明治の儒教、漢学と近代企業家に関する研究を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

横山 俊一郎、「永田仁助の経済倫理 天人未分と武士道の精神」、『東西学術研究所紀要』、関西大学東西学術研究所、査読有、第50輯、2017年、323～340頁

横山 俊一郎、「山口県佐波郡における泊園書院出身者の事業活動の一考察 実業家尾中郁太・古谷熊三を中心に」、『東西学術研究所紀要』、関西大学東西学術研究所、査読有、第49輯、2016年、435～451頁

横山 俊一郎、「男爵本多政以の思想と事業 泊園学と禅宗」、『東アジア文化交渉研

究』、関西大学大学院東アジア文化研究科、査読有、第9号、2016年、305～317頁

〔学会発表〕(計2件)

横山 俊一郎、「藤澤南岳の世界認識に関する考察」、関西大学創立130周年記念泊園書院シンポジウム、2016年10月30日、関西大学(大阪府吹田市)

横山 俊一郎、「泊園書院出身大阪商人たちの挑戦」、東アジア文化交渉学会第8回国際シンポジウム、2016年5月7日、関西大学(大阪府吹田市)

〔図書〕(計1件)

横山 俊一郎 他、関西大学出版部、文化交渉学のパースペクティブ ICIS 国際シンポジウム論文集、2016年、469頁(329～352頁)

〔その他〕

ホームページ等

<http://researchmap.jp/0403/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山 俊一郎 (YOKOYAMA, Shunichiro)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員
研究者番号：60759827

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：

(4) 研究協力者

なし ()